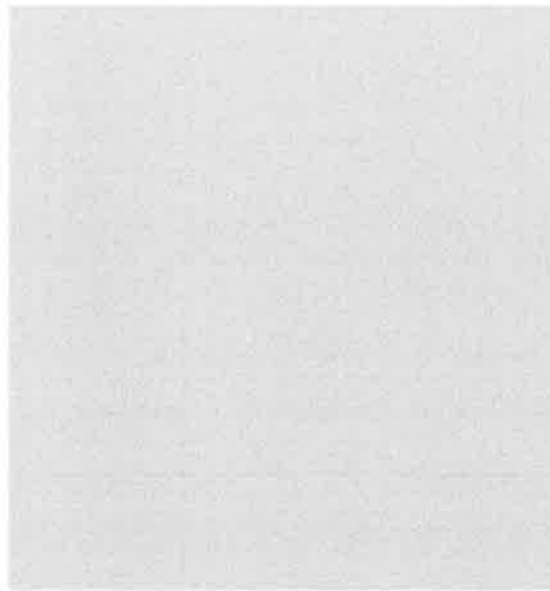




**国指定天然記念物
岩神の飛石環境整備事業報告書**



2016
前橋市教育委員会

例言

本書は平成 25～27 年度に実施した国指定天然記念物岩神の飛石環境整備事業の報告書である。文章執筆に当たっては文末に文責者を明示した。報告文は、所属と氏名を文頭に示した。なお、各種分析報告は紙数の都合上で結論を中心に編集したものである。すべての報告本文は前橋市教育委員会で保管してあり供覧できる。本書は、平成 27 年 6 月 26 日より平成 28 年 3 月 10 日までの履行期間で、「国指定天然記念物岩神の飛石環境整備事業報告書作成委託業務」として前橋市教育委員会から、技研コンサル株式会社（主任技術者：地盤環境部・飯酒孟久夫）が受託したものである。本書は、委員の能登 健および事務局の小島純一と宮沢竜一によって構想され、編集は技研コンサル株式会社文化財研究所の檜崎修一郎がおこなった。裏表紙のスケッチは、故根立国夫氏が 1992 年に発表した『まえばし街角スケッチ集』の「飛石稲荷」（1989 年 4 月）を、ご子息の根立昌幸氏の許可を得て転載した。

本書の編集に際してご協力・ご助言をいただいた方々を下記に示して深甚なる謝意を表したい（五十音順）。

池田信二 内田憲治 岡田昭二 環境省長野自然環境事務所万座自然保護官事務所 剣持和彦 剣持千秋
中之条町伊勢宮 中之条町教育委員会事務局 堀越正敏 綿貫知房



序

前橋は、陽光を浴びて輝く赤城の裾野と、光をあつめて流れる利根の清流にはぐくまれた、自然豊かな街です。古墳王国として語られる豊かな歴史をたたえた街でもあります。また、多くの文化人をはぐくんだ旅情豊かな詩の街でもあるのです。そのような中であって街中に忽然と聳え立つ「岩神の飛石」は人の眼を威圧させるばかりの巨岩で、その姿は時として神の依代をもイメージさせるおどろおどろしさも醸し出しています。

「岩神の飛石」は火山活動によって生成された岩石です。この飛石がどこから岩神の地に辿り着いたのかは前橋市民の興味の対象でした。浅間山からか。それとも赤城山からなのか。いずれにしても、この巨岩を運んだ火山活動の大きさはいかに。この謎解きは市民のあいだでも想像に余る難問だったのです。

天然記念物として国指定になったのが昭和十三年。すでに七十有余年を経てようやく科学的なメスが加えられることになりました。平成二十五年度にスタートした環境整備事業は、飛石の歴史性とともに、前橋の大地を形成した地理や地質などの理科学の上でも、その解明が期待されます。それは、心豊かな前橋の歴史とその風土性について多岐にわたる理解をうながす契機にもなるでしょう。もちろんこの巨岩が安心・安全な状態で観察できる対策を講じることは大前提です。

国指定岩神の飛石環境整備事業報告書の上梓にあたって、文化庁・県教育委員会をはじめとして多くの関係各位のご尽力をいただいたことに深甚なる感謝をこめて序文といたします。

前橋市教育委員会

教育長 佐藤 博之

国指定天然記念物岩神の飛石環境整備事業報告書

目 次

序	
写真で見る「岩神の飛石」	
古写真で見る「岩神の飛石」	
飛石に関連する巨岩	
飛石の起源と流下経路	
国指定を伝える書類	
第Ⅰ章. 環境整備事業の目的と概要	1
1. 文化財の名称と指定日	1
2. 環境整備事業の目的	1
3. 組織	1
4. 経過	2
第Ⅱ章. 「岩神の飛石」の概要	4
1. 位置と概要	4
2. 飛石の平面図・側面図	5
3. 飛石の計量的分析	7
4. 指定範囲	8
5. 指定理由	12
6. 指定前後の経過	12
第Ⅲ章. 環境整備事業の成果	18
1. 危険樹木の剪定と伐採	18
2. 囲柵の撤去と新設	20
3. 定点観測	21
第Ⅳ章. 発掘調査および理化学分析の結果	32
1. 「岩神の飛石」のトレンチ発掘調査	32
2. 前橋泥流の断面調査	38
3. 「岩神の飛石」のボーリング調査	46
4. 「岩神の飛石」ボーリングコアのテフラ分析	50
5. 「岩神の飛石」の起源に関する岩石学的調査と分析	60
6. 熱ルミネッセンス法による「岩神の飛石」の分析	75
第Ⅴ章. 成果と問題点	78
1. 見学環境の整備	78
2. 安全対策	78
3. 供給源の確定	78
4. 普及活動への展望	78

写真で見る「岩神の飛石」

群馬県前橋市昭和町はかつて岩神町と呼ばれていた。この飛石が町名のいわれである。岩体が赤みを帯びていることから、赤石とも呼ばれていた。地表からの高さは、9.47メートルである。



1. 西から見た飛石 一体の巨岩は、いくつかのひび割れがある。



2. 北東から見た飛石 ここにも、ひび割れが各所にあるが一つの大きな岩体であることがわかる。



3. 南東から見た飛石 大きくオーバーハングして下部は庇状になっている。



4. 北西側の庇状になった部分には石宮が置かれており、岩全体が神格化されていることがわかる。



5. 東側の庇状部分は最も大きく奥行もある。道祖神や庚申塔は後から持ち込まれたもの。



6. 岩神稲荷神社の手水鉢は飛石から割られた岩の一部が利用されている。



7. 飛石本体(左)や神社の手水鉢(右)には矢穴がありかつて石工によって割られていたことがわかる。

古写真で見る「岩神の飛石」

「岩神の飛石」は古くから前橋市の名所であった。現在までに四枚の古写真が見つかったが、いずれも撮影年代が不明である。このうち2は明治43年の「一府十四県連合共進会」のときの記念絵葉書だともいう。河川改修以前の広瀬川が当時は飛石の間際に流れていた。



1. 南雲榮治・柳井久雄監修『目で見える前橋の100年』（2006 郷土出版社）より転載



勝 奇 石 飛 の 神 岩 （所名橋前）（明治頃）

2. 明治43年頃の絵葉書



3. 関 俊治・松本夜誌夫編『目でみる群馬県の大正時代:中・東毛編』(1986 国書刊行会)より転載



4. 丸山知良・島田幸一共編『ふるさとの思い出写真集:明治・大正・昭和前期』(1979 国書刊行会)より転載

飛石に関連する巨岩



1. 敷島公園にある「お艶ケ岩」。この岩も飛石と同質の赤石で、当初は飛石とともに国指定の候補に入っていた。



2. 昭和13年頃に指定書類の添付図版として撮られた「お艶ケ岩」（群馬県教育委員会提供）

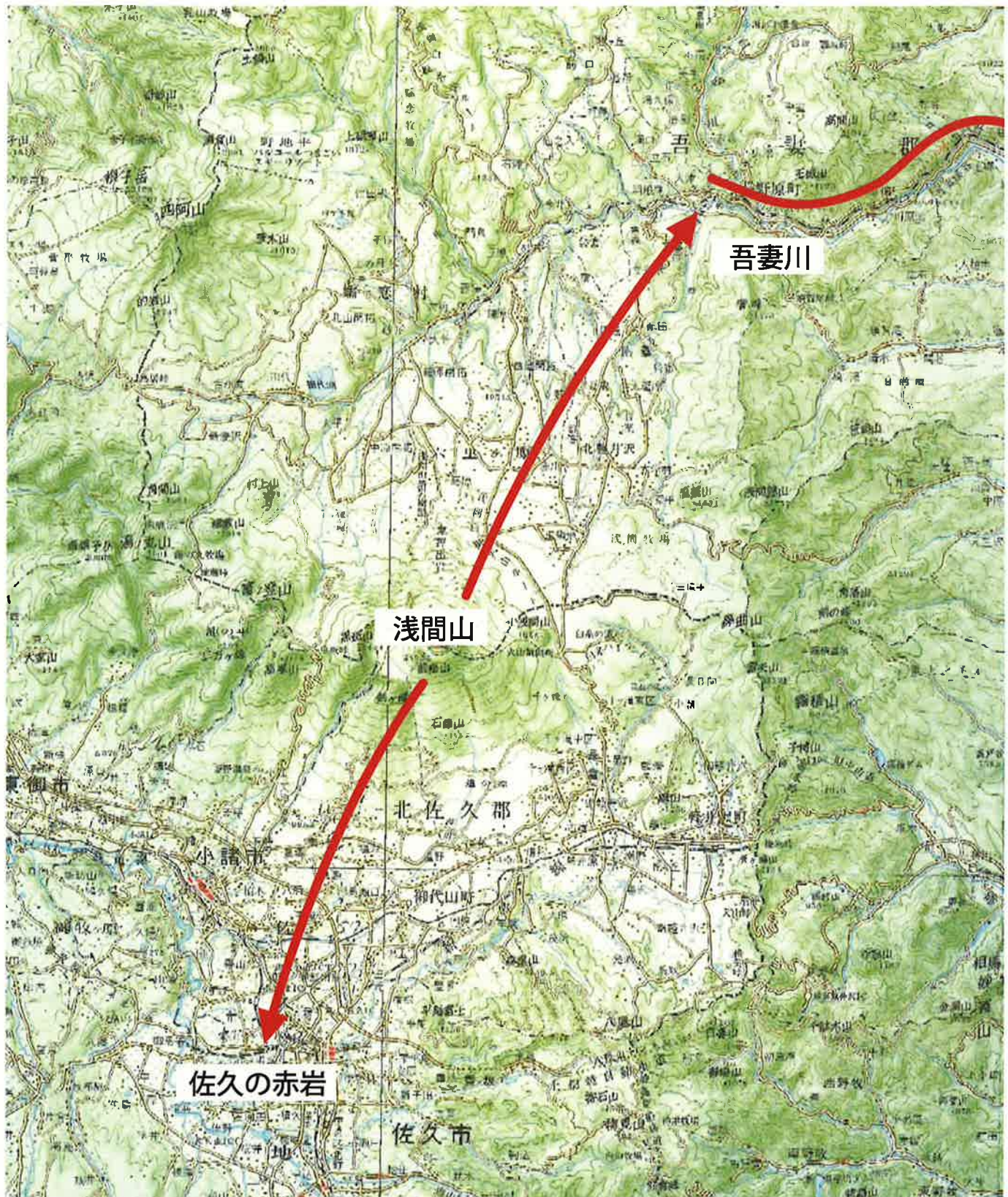


3. 中之条町中之条にある町指定天然記念物「とうけえ石」は「岩神の飛石」と同じ赤石である。



4. 佐久市赤岩弁天神社の巨岩は「岩神の飛石」と同系統の赤色をしている。

飛石の起源と流下経路



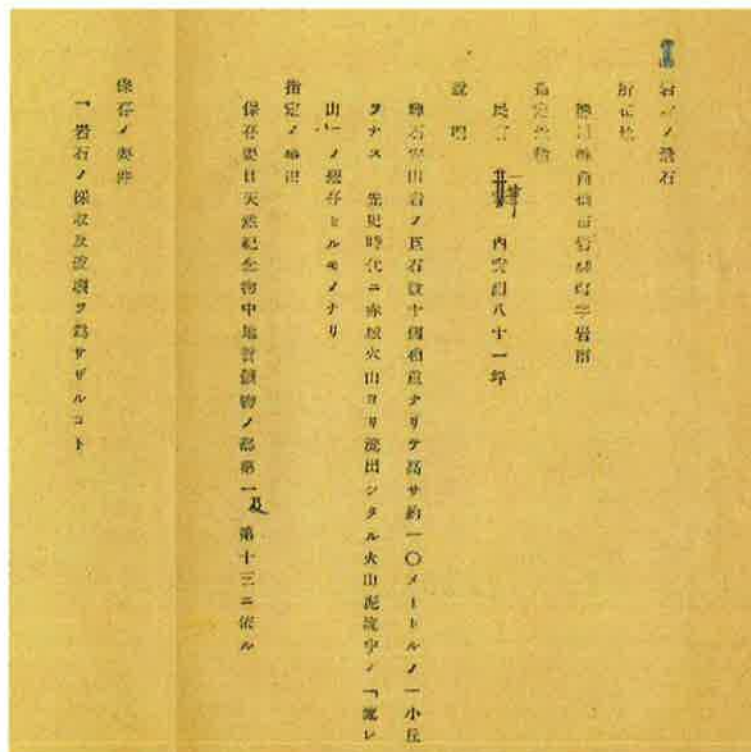
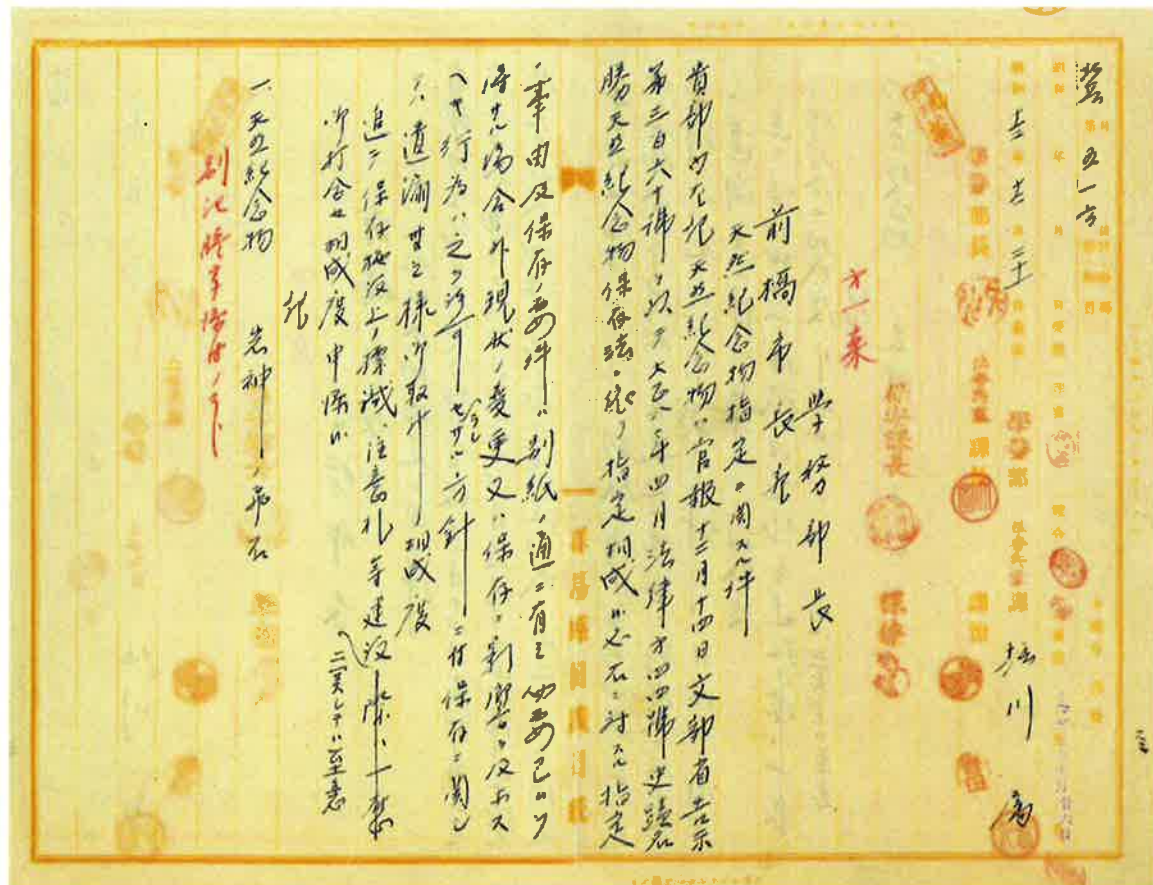
1. 「浅間山説」にもとづく飛石の移動経路 山麓から吾妻川に入り、利根川を経て岩神町にたどりついた。一方で佐久の方へも流れている。





2. 「赤城山説」にもとづく飛石の経路 国指定申請に伴って調査された時の記録。飛石は山頂付近から旧富士見村を經由して利根川に流れ込んだと思われていた。(群馬県教育委員会提供) [縮尺は、異なる]

国指定を伝える書類



昭和 13 年に天然記念物指定を伝える書類 本書は県学務部長から前橋市長へ通知するための案文(上)で別紙(下)には指定説明が記されている。(p.12)の「指定理由」参照) (群馬県教育委員会提供)

第Ⅰ章 環境整備事業の目的と概要

1. 文化財の名称と指定日

名 称	国指定天然記念物 岩神の飛石
所 在 地	前橋市昭和町3丁目29-11 岩神稲荷神社
指 定 日	昭和13（1938）年12月14日

2. 環境整備事業の目的

岩神の飛石は昭和13年12月14日に単独に存在する巨岩として国指定天然記念物に指定されたものである。地元では“飛石”と呼ばれているが、利根川流域に点々と分布している同種の岩石が赤色を呈していることからそれを総称して“赤石”とも呼ばれている。その来歴については、指定当初は赤城起源説であったが、最近になって浅間起源説が提唱されている。

岩神の飛石は、群馬県指定史跡「櫃石」をはじめ、市内に点在する巨岩遺跡とともに注目され続けてきたが、近年では本市において地質学的な意味において重要な文化財であることから、その起源問題を中心にして学術的な再考を望む声が高まっている。

また、最近になって、飛石本体には大きなひび割れが何本もあることから、平成23年3月11日の東日本大震災以降に地元においても地震の影響が出ているのではないかという心配がでた。

さらに、岩神の飛石の環境整備事業は昭和51年度に囲柵・標識および説明板の設置工事などの整備がおこなわれたが、その後は市教委職員や文化財パトロール員の巡回管理のみで30年以上のあいだ整備事業はされていなかった。最近になって、飛石周辺および巨岩本体にも樹木などが繁茂するとともに、囲柵も老朽化が進んでいることなどからも樹木、囲柵などの整備などが急がれる状況にあった。

これらの状況に踏まえて文化財の保全と環境整備とともに従来おこなわれてこなかった詳細な図面の作成や岩石の分析などの各種調査をおこなうことになった。

（小島純一）

3. 組織

整備事業および、周辺環境の整備や保存管理計画策定および岩石の学術的な調査を実施するに当たって、その諸整備事業を有効かつ円滑におこなうため、有識者による国指定天然記念物「岩神の飛石」環境整備委員会を設立し、指導助言をいただきながら事業を実施することとした。

委員会名簿

委員

野村 哲	群馬県文化財保護審議会専門員	地質学	
梅澤 重昭	前橋市文化財調査委員長	考古学	平成25～26年度
井上 唯雄	前橋市文化財調査委員長	考古学	平成27年度
能登 健	前橋市文化財調査委員会委員	考古学	平成27年度
片山 満秋	前橋市文化財調査委員会委員	天然記念物	平成25～26年度
瀬尾 茂	東照宮宮司（岩神稲荷神社所有者）		平成25～27年度
小池 洋七	昭和町三丁目自治会長・岩神稲荷神社責任役員		平成25～27年度

浅野 敏雄 昭和町三丁目自治会長

平成 27 年度

指導助言者

文化庁文化財部記念物課	主任文化財調査官	桂 雄三	平成 25 年度
文化庁文化財部記念物課	文部科学技官	柴田 伊廣	平成 26～27 年度
群馬県教育委員会文化財保護課	指導主事	田島 輝之	平成 25～27 年度
群馬県立自然史博物館	学芸員	菅原 久誠	平成 25～27 年度
群馬大学教育学部	講師	能登 健	平成 25～26 年度
元前橋市文化財調査委員会	委員	片山 満秋	平成 27 年度

事務局

前橋市教育委員会事務局	教育長	佐藤 博之	
前橋市教育委員会事務局	教育次長	中島 實	平成 25～26 年度
前橋市教育委員会事務局	教育次長	関谷 仁	平成 27 年度
前橋市教育委員会事務局	文化財保護課長	小島 純一	平成 26～27 年度
事務局担当職員	補佐	小島純一（平成25 年度）・係長 岩瀬孝弘（平成 26・27 年度）	
	主任	宮沢竜一（平成 25～27 年度）	

4. 経過

（1）平成 25 年度事業の概要

事業主体	前橋市
事業名	天然記念物岩神の飛石史跡など登録記念物歴史の道保存整備事業
事業費	4,508,200 円
実施期間	平成 25 年度中
実施方法	国、群馬県からの補助金を受け、文化財の修理に精通した業者と工事請負契約を締結し実施する。
調査内容	樹木伐採整備 囲柵撤去および設置工事 飛石測量委託および巨岩隙間幅の定点設置と測量 岩石成分分析調査

（2）平成 26 年度事業の概要

事業主体	前橋市
事業名	天然記念物岩神の飛石史跡など登録記念物歴史の道保存整備事業
事業費	9,507,120 円
実施期間	平成 26 年度中
実施方法	国、群馬県からの補助金を受け、文化財の修理に精通した業者と工事請負契約を締結し実施する。
調査内容	地下部分確認調査（ボーリング掘削調査） 考古学的調査（発掘調査）

前橋泥流断面図作成

岩石成分分析調査（昨年度よりの継続）

（３）平成 27 年度事業の概要

事業主体	前橋市
事業名	天然記念物 岩神の飛石 歴史活き活き！史跡など総合活用整備事業
事業費	6,377,520 円
実施期間	平成 27 年度中
実施方法	国、群馬県からの補助金を受け、文化財の修理に精通した業者と工事請負契約を締結し実施する。
調査内容	指定範囲杭設置測量 ボーリングコアのテフラ分析調査 岩石成分分析調査（継続調査） 国指定天然記念物岩神の飛石環境整備事業報告書作成



写真 1. 委員会風景：協議



写真 2. 委員会風景：資料観察



写真 3. 現地調査風景：飛石



写真 4. 現地調査風景：金島の浅間石

第Ⅱ章 「岩神の飛石」の概要

1. 位置と概要

岩神の飛石は、J R前橋駅より北北西に約 2.8 キロメートルにあり、群馬大学病院の西に隣接して位置する。前橋市の地形は、北東部の赤城山麓、南西部の前橋台地と呼ばれる洪積台地、そしてこの両者に挟まれた広瀬川低地帯と呼ばれる旧利根川流路の沖積低地で構成されており、そのほかに現利根川の氾濫原が市内中央部に開析されている。

前橋台地は今から 2 万年から 3 万年のあいだに発生した浅間山の山体崩壊を起源とする大規模な泥流堆積物で形成されている。この泥流は浅間山麓から吾妻川を経て利根川に流入して堆積したもので、前橋泥流と呼ばれている。その流下筋は給源からおおよそ 60 キロメートルである。この前橋泥流は榛名山東南麓から烏川左岸、北は赤城山西南麓で桃の木川流域の範囲でほぼ扇状地形を呈しているが、広瀬川低地帯は利根川の変遷のなかで前橋台地を洗掘して形成されたもので、前橋市小島田町付近では赤城山麓の末端部に接して侵食されずに残っている部分が見つかった。また、現利根川は応永年間に変流されたものといわれているが、両岸は 10 メートル前後の急崖になっており、そこには各所で前橋泥流の堆積物が露頭として観察できる。

岩神の飛石は、旧利根川と現利根川の流路に挟まれた前橋台地の最上部に位置している。地上部の大きさが、周囲が約 60 メートル、高さは地表に露出した部分だけで 9.47 メートルとされている。今回の調査では地表下に約 10 メートルの埋没部分を確認している。輝石安山岩の巨石で、赤色が特徴であることから赤石と呼ばれることもある。

この赤石と呼ばれる岩石は利根川の上流部に散在しているが、赤城山起源のものは山体から渋川市坂東橋付近にかけてあり、浅間山起源のものは吾妻川流域に分布がある。浅間山起源説は浅間山の山体崩壊にともなって泥流で運ばれたとの見解を示し、赤城山起源説は坂東橋付近にあった岩塊が洪水にともなって岩神まで運ばれたとの見解になる。今回の調査分析は、飛石のおおきさの確定とともに、これら両説の検証に主眼がおかれている。

(宮沢竜一)

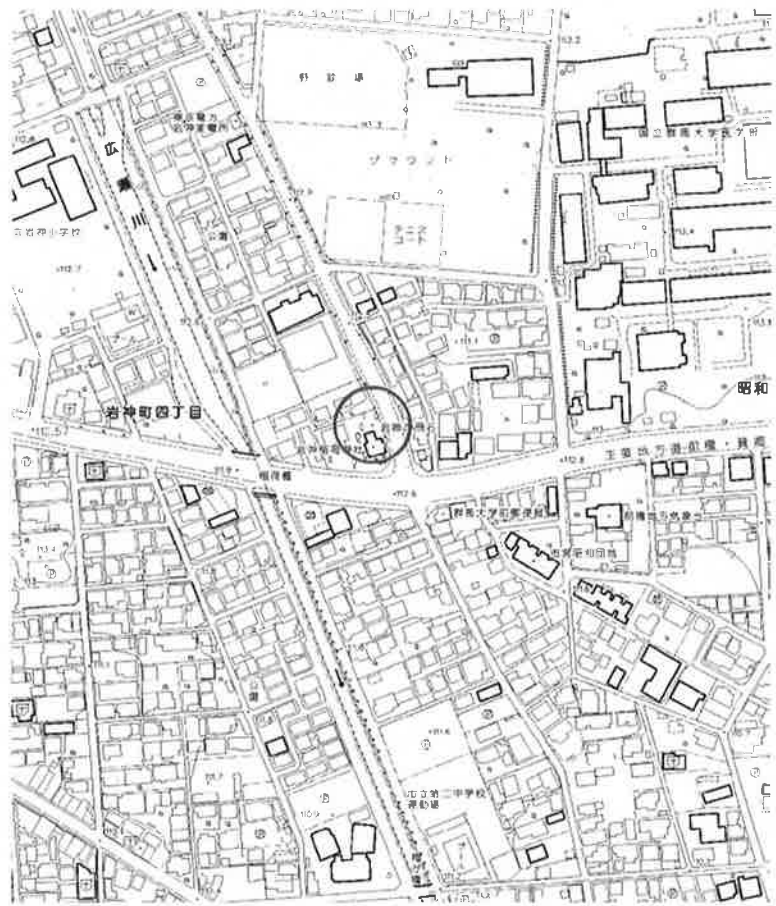


図 1. 飛石の位置図 (上が北)

2. 飛石の平面図・側面図

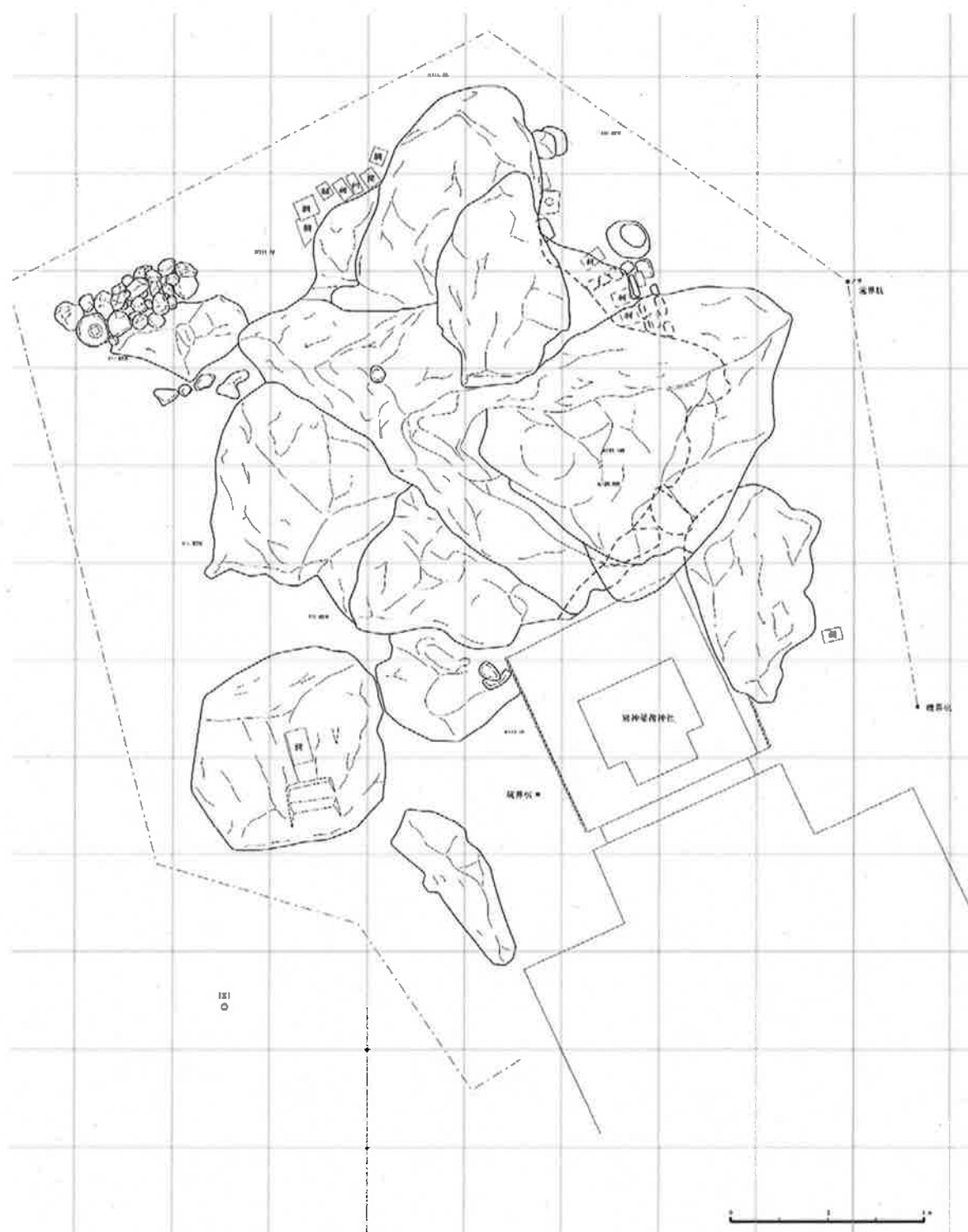


図 2. 飛石平面図（上が北）

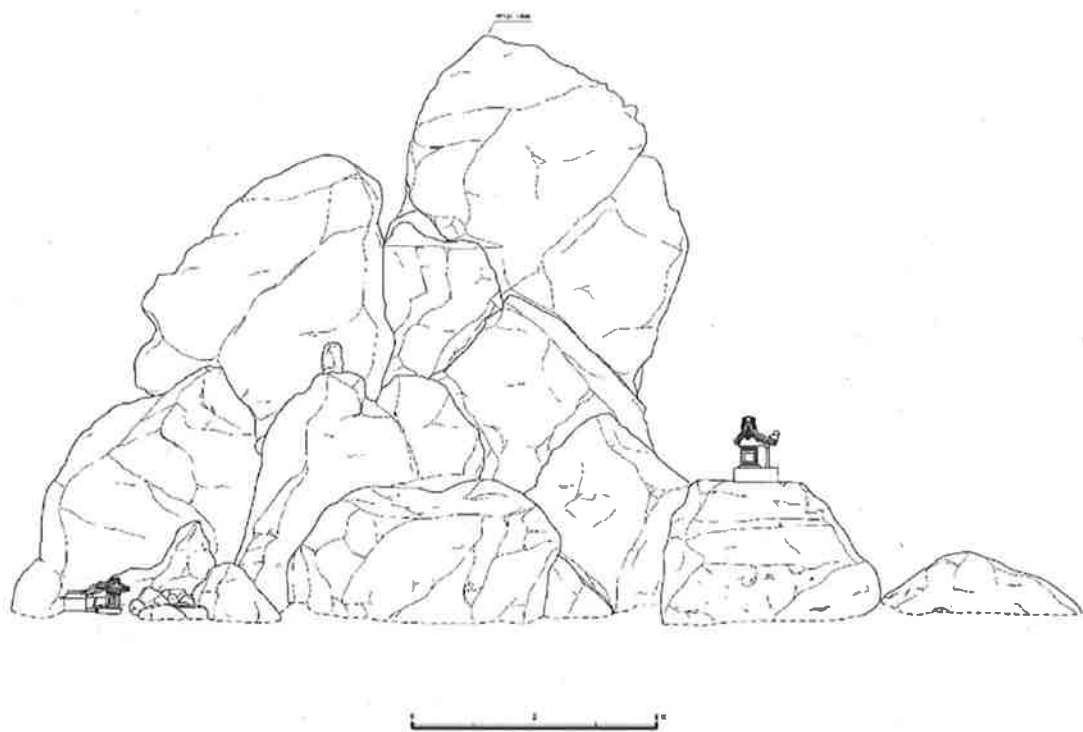


図 3. 飛石西側面図

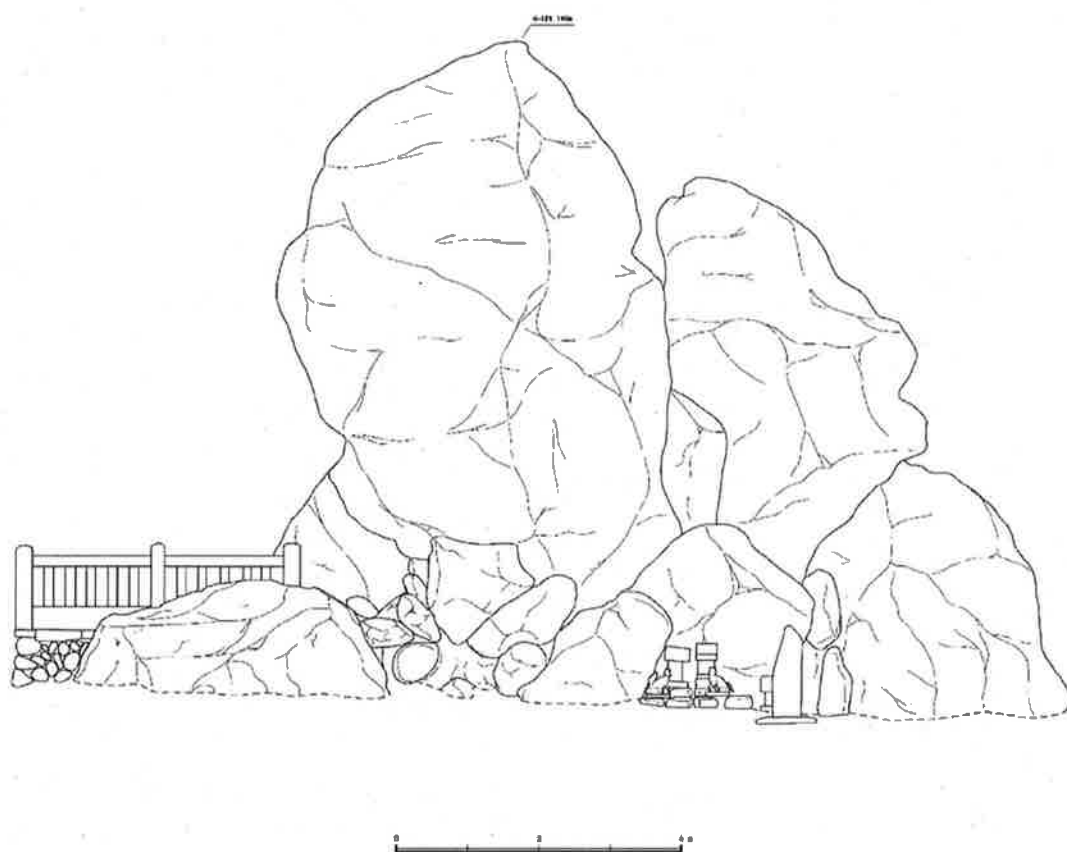


図 4. 飛石東側面図

3. 飛石の計量的分析

飛石の地上部における計測値は地上測量によって算出した。その結果、地上からの比高（高さ）は露出面から 9.47 メートルであった。また、地表面での露出部の範囲は 84 平方メートルであった。なお、地上部の体積は三次元計測で導き出したもので 295 立方メートルであった。この場合、割れ目幅の面積を差し引いていない。

地下部の体積については近接して実施された地中ボーリング調査の結果で地下 8.5 メートルの地点で飛石底部を確認していることから、地表面 84 平方メートルすべての深度と仮定して算出し、714 立方メートルの数値を得た。

なお、飛石を構成する輝石安山岩の比重は 2.08 と計測され、地上部および地下部の合計から総重量を 2,098 トンと算出した。

今後、安全対策などに資する数値は、さらに詳細な計測が必要になろう。



図 1. 上面観（上が北）



図 2. 東側面観



図 3. 地下部まで想定した図

体積および重量算出のために三次元レーザー計測を試みた。左は上部からみた平面図。左下は地上部の側面で右下は下部を想定した全体の体積表現である。なお、地下部は地上部範囲以下全面を仮定してのものである。

4. 指定範囲

件 名： 国指定天然記念物岩神の飛石指定杭設置測量業務委託

履行期間： 平成 27 年 10 月 30 日～平成 28 年 3 月 10 日

目 的： 国指定天然記念物岩神の飛石の指定範囲杭を設置し管理を行う

指定面積： 約 268.11 m²

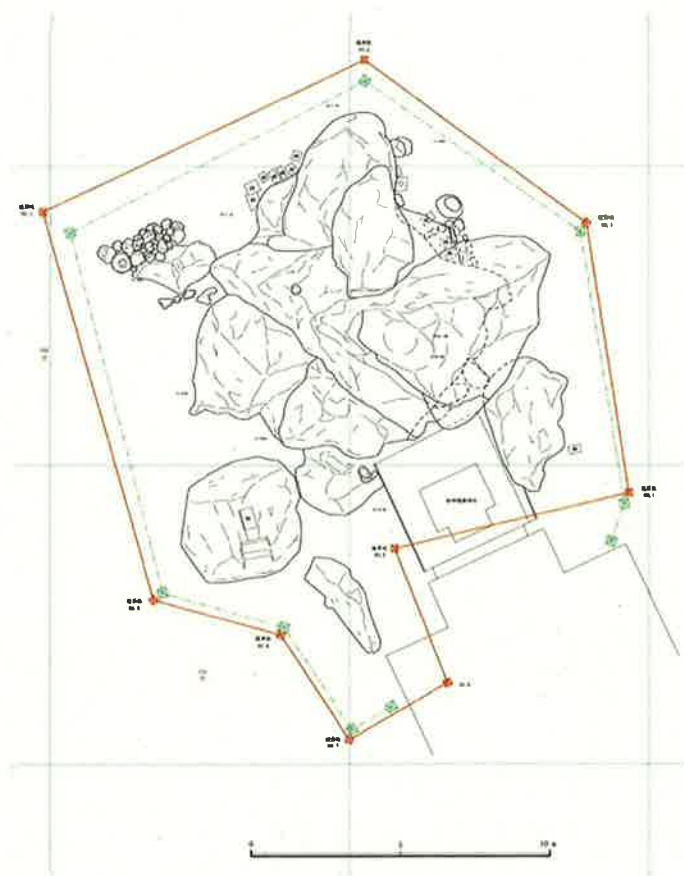


図 1. 飛石平面図と定点位置図

表 1. 飛石指定杭成果

点名	X座標	Y座標	標高	備考
NO, 1	45,338.472	-69,460.242	-	
NO, 2	45,343.551	-69,449.498	-	
NO, 3	45,338.111	-69,442.072	-	
NO, 4	45,329.082	-69,440.649	-	
NO, 5	45,327.217	-69,448.485	-	
NO, 6	45,322.731	-69,446.694	-	(社殿内の為CADデータ計測による)
NO, 7	45,320.812	-69,450.014	-	
NO, 8	45,324.324	-69,452.304	-	
NO, 9	45,325.490	-69,456.565	-	

種別	境界杭	点名	No. 1	実施日	平成27年12月18日
X 座標	45338.472	Y 座標	-69460.242	観測日	平成27年12月25日



写真 1. 杭 No.1

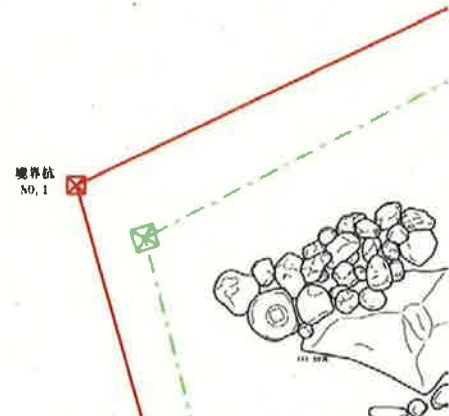


図 2・表 2. 杭 No.1 位置図

種別	境界杭	点名	No. 2	実施日	平成27年12月21日
X 座標	45343.551	Y 座標	-69449.498	観測日	平成27年12月25日



写真 2. 杭 No.2

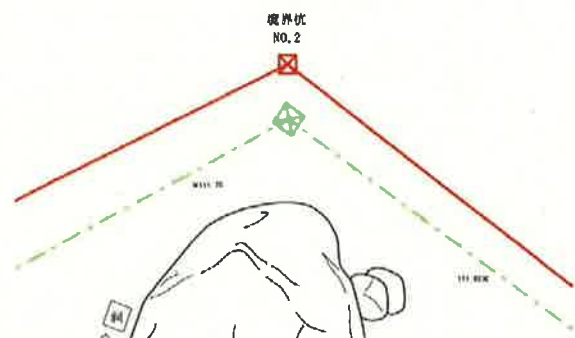


図 3・表 3. 杭 No.2 位置

種別	境界杭	点名	No. 3	実施日	平成27年12月21日
X 座標	45338.111	Y 座標	-69442.072	観測日	平成27年12月25日



写真 3. 杭 No.3

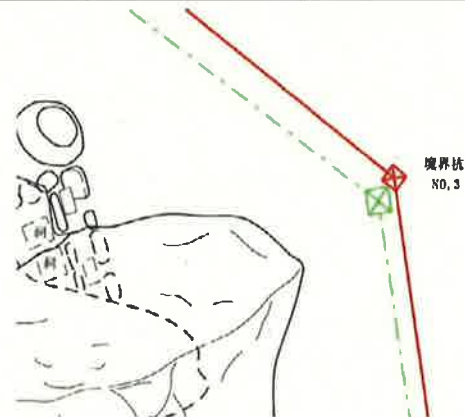


図 4・表 4. 杭 No.3 位置

種別	境界杭	点名	No. 4	実施日	既設
X 座標	45329.082	Y 座標	-69440.649	観測日	平成27年12月25日



写真4. 杭 No.4



図5・表5. 杭 No.4 位置

種別	境界杭	点名	No. 5	実施日	既設
X 座標	45327.217	Y 座標	-69448.485	観測日	平成27年12月25日



写真5. 杭 No.5



図6・表6. 杭 No.5 位置

種別	境界杭	点名	No. 6	実施日	既設
X 座標	45322.731	Y 座標	-69446.694	観測日	平成27年12月25日



写真6. 杭 No.6

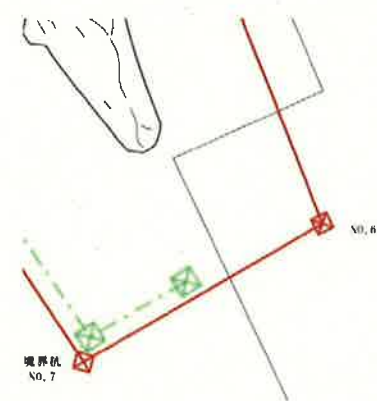


図7・表7. 杭 No.6 位置

種別	境界杭	点名	No. 7	実施日	平成27年12月18日
X 座標	45320.812	Y 座標	-69450.014	観測日	平成27年12月25日



写真 7. 杭 No.7

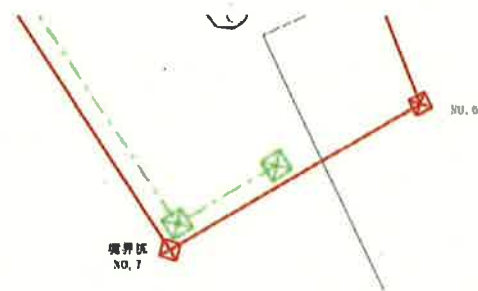


図 8・表 8. 杭 No.7 位置

種別	境界杭	点名	No. 8	実施日	平成27年12月18日
X 座標	45324.324	Y 座標	-69452.304	観測日	平成27年12月25日



写真 8. 杭 No.8

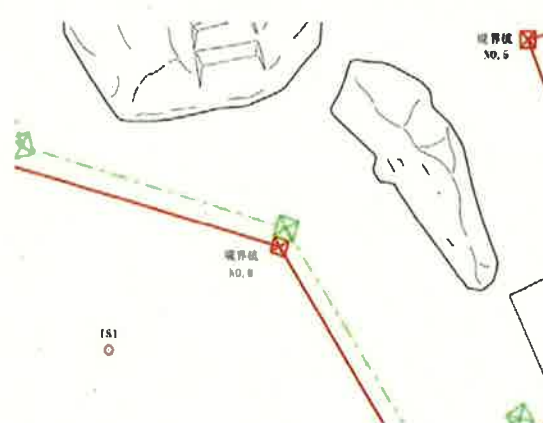


図 9・表 9. 杭 No.8 位置

種別	境界杭	点名	No. 9	実施日	平成27年12月18日
X 座標	45325.490	Y 座標	-69456.565	観測日	平成27年12月25日



写真 9. 杭 No.9

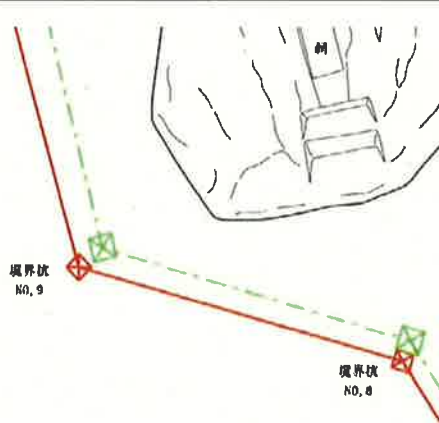


図 10・表 10. 杭 No.9 位置

5. 指定理由

輝石安山岩ノ巨石数十個相重ナリテ高さ約一〇メートルノ小丘ヲナス。先史時代ニ赤城火山ヨリ流出シタル火山泥流中ノ「流レ山」ノ残存セルモノナリ。

6. 指定前後の経過

指定前後の調査や解説文の推移によって指定までの経過と指定後の経過をたどる。

(1) 江戸時代

貞享元(1684)年

『前橋風土記』に記載された岩神の飛石

岩神 比利根川の水傍に在り。四つの塊石累積し、高さ三丈余、広さ三四十歩。石は紫赤色を帯ぶ。若し其の下に至るときは則ち危怖道うべからず。肌は汗かき四肢収らず。累石の縫間に諸木及び藤蘿を生ず。相伝う。古え洪水天に漫り、片石山の北傍解けて流れて此の地に止る。石工之を摧て造屋の用に充てんと欲す。石中声有り、人の号ぶが如し。濃血流れ走る。石工四肢麻痺し、両目眩暗して倒れ死す。故に土人相尊んで神と称す。

(2) 昭和時代

昭和10(1935)年7月

前橋市長・江原桂三郎から文部大臣・松田源治に宛てた指定申請書「天然記念物指定ノ件内申」にある「飛石」の説明

六 溶岩ニシテ周囲延長百九十八尺、高さ三十一尺八寸。直立セル巨巖ニシテ中央ニ大亀裂一ヶ所、其他小亀裂数ヶ所アリ。一見大岩石ヲ累積セルガ如ク克ク保存セラレ、殆ンド破壊ノケ所ナシ。
七 由来 徴証 伝説 岩神ノ飛石ハ前橋市ノ西北隅ニ位シ、西ニ榛名妙義ノ連山、北ニ赤城ノ峻嶺ヲ望ミ、利根ノ清流ヨリ分水セル広瀬川東岸ニ近キ村社稲荷神社境内ニ在リ、坦々一望関東平野ノ中ニ毅然トシテ聳、高さ三十一尺八寸、稀ニ見ル溶岩ノ巨巖ナリ。往時大山噴火ノ際飛来セルモノト謂ヒ、或ハ利根川大洪水ニ際シ本県勢多郡南橘村地内片石山ノ北崖崩壊流下シ此ノ地ニ止リシモノトモ伝ヘ、幾多ノ伝説ヲ有シ居レリ。併シナガラ学術的ニ考察スレハ、此ノ巨巖ハ太古赤城山噴火ノ時泥流ニ乗リテ五里ノ遠隔タル此ノ地ニ運ハレ止リタルモノト思推セラレ、之レガ証査トシテ同山麓ニハ更ニ点々小溶岩残留セルヲ認ム。
伝説 往時近在ノ石工数名相ヒ語ヒ岩神ノ飛石ヲ切り出シ一儲ケナサントシ鑿ヲ此ノ岩ニ当テタル處多量ノ血液流出シタル為、石工ナドハ怖レ戦キ以来此岩ヲ神トシテ祀リ一祠ヲ建立シ後年稲荷神社トナリ現在ニ至レルモノニシテ所在町名モ祀リシテ岩神ヲ取り岩神町ト称ス。

昭和10(1935)年9月

「岩神ノ飛石ノ系統ニ関スル調査」報告(この調査は、指定に当たり文部省から県へ詳細調査の指示があったためのもので、中曽根都太郎と岩沢正作が実施したものである。)

岩神ノ飛石ハ前橋市岩神町ニアリ、附近一帯ハ利根川ニ依ツテ造ラレタル沖積層ニ属スル平野ニシテ、飛石ハ茲ニ他ノ山嶽、大岩石等ト縁故ナク飛離レテ一塊ノ岩石トシテ屹立ス。岩石ノ性質ハ輝石及ビ角閃石ヲ含ム安山岩ニシテ外觀赤褐色ヲ呈ス。此ノ飛石ノ由来系統ニ関シテ従来調査セラルコト

ナク傳説トシテハ次ノ説アリ。

(一) 片石山ヨリ流下セリトノ説 岩神ノ飛石ヨリ利根川ノ上流、勢多郡南橋村大字田口所在ノ片石山ガ利根川大洪水ノ際崩壊シテ流下セルモノナリトノ説ナルガ、片石山ノ岩石ハ黝黒色ヲナセル輝石安山岩ニシテ橋山等ト共ニ赤城火山ノ外輪山ノ系統ニ属シ、飛石トハ岩石ノ性状ヲ異ニス。

(二) 浅間山ヨリ大噴火ノ際飛来セリトノ説 天明三年浅間火山大爆發ノ際此ノ地ニ飛来セリトノ説ナルガ、天明三年ノ浅間山大爆發ハ有史以来最モ猛烈ヲ極メタルモノナレドモ、飛石ノ如キ巨大ノ岩石ヲ直接ニ噴火口ヨリ約五十軒ヲ隔テタル当地迄放出セリトハ認メラレズ、又同年噴出ノ溶岩ハ現ニ浅間山鬼押出熔岩流ニ見ルガ如ク黒褐色ノ普通輝石及び紫蘇輝石ヲ含ム両輝石安山岩ニシテ、飛石トハ其ノ性質ヲ異ニス。又同年噴出ノ泥流ニ依リテ運バレタル流レ丘モ岩質ハ両輝石安山岩ナリ。尚浅間山ニハ飛石ト同質ノ熔岩ナシ。

(三) 氷河ニ依リテ運バレタル漂石ナリトノ説 當地方ニ氷河アリシハ認メラレズ、又飛石ニハ漂石ノ性状ナシ。

飛石ハ北方二十軒ノ地ニアル赤城火山ニ由来スルモノニシテ、赤城火山ヨリ噴出セル泥流ニヨリテ運バレタル流レ丘ナリト認メラル、其ノ證左ノ如シ。

第一 岩石ノ性状ト赤城山トノ関係 赤城山ハ二重式火山ニシテ地質時代ノ第三期末ヨリ第四期ノ始メニ亘リ、当時ノ地盤タル古生層及ビ第三期層ヲ破リテ噴出セルモノナリ。第一次ノ噴出ハ最高黒檜山ヲ始メ、駒ヶ岳、鳥居峠、茶ノ木畑峠、牛石峠、前浅間山、姥子峠、鉾柄山、出張山、薬師岳等ヨリ成ル外輪山ヲ噴出セルモノニシテ、荒山、鍋割山、鈴ヶ嶽モ此ノ際ノ大噴口ヨリ噴出セル溶岩、火山岩層ニヨリテ生成セルモノト認メラル。外輪山ヲ形成セル岩石ハ普通輝石ト紫蘇輝石トヲ含ム両輝石安山岩ニシテ飛石トハ岩質ヲ異ニス。第二次ノ噴出ハ中央火口丘タル地蔵嶽ヲ噴出セルモノニテ此ノ際ノ活動ハ余リ旺盛ナラズ、外輪山ヲ越エテ噴出物ヲ放出スルニ至ラズ、地蔵嶽ノ岩石ハ輝石及び角閃石ヲ含ム安山岩ニシテ、灰白色ノモノト赤褐色ノモノトアリ、兩者ノ推移セルモノモ認メラル。赤褐色ノモノニハ岩質ノ堅実ナルモノト、粗鬆ナルモノトアルガ、此ノ粗鬆ナルモノト飛石トガ同質ナリ。第三次ノ活動ハ小沼ヲ火口トスル寄生火山ノ噴出ニシテ長七郎山、虚空蔵山、浅香山ハコノ火口壁ナリ。此処ノ岩石ハ輝石ト角閃石トヲ含ム安山岩ナレドモ黝黒灰色ヲ呈シ、飛石トハ其ノ性状ヲ異ニス。第四次ノ活動ハ中央火口丘ノ一部及ビ外輪山ノ南部ヲ破リテ地獄谷ノ爆裂火口ヲ造リタルモノナリ。飛石ハ此ノ際噴出ノ泥流ニヨリテ運バレタルモノト認メラル。

第二 同系統ニ属スル流レ丘ノ分布 岩神飛石ガ赤城山ニ由来スト認メラルル流レ丘ハ前橋市附近ノ利根川ノ旧河床及ビ現川敷ニハ比較的多ク認メラルレドモ、利根川沿線ニ於テ前橋市附近以外ニハ上流ニ於テモ認メラレズ現利根川ノ下流ニハ同系熔岩ノ轉石ハ認メラレルドモ流レ丘ハ少キガ如シ。前橋市北方ヨリ赤城山ニ亘リ明ニ同系統ノ流レ丘ト認メラルルモノハ岩礫、土砂等ニヨル埋没、人為ノ採掘等ノ為メ比較的少数ナリ、同系統ノ轉石ハ各地ニ認メラレ、石材トシテ採取ノモノモナリ多量ニ認メラル。

(この後、「概況次ノ如シ」として、お艶ヶ岩のほかには岩神町大渡橋付近、総社町新井の利根川河川敷、南橋村川原、同関根および富士見村内では細ヶ沢川河底、同沼ノ窪尻川など8か所が同系統の露頭としてあげられている。)

昭和 13 (1938) 年

県学務部長から前橋市長に宛てた指定決定書「天然記念物指定ニ関スル件」にある説明および文化庁国指定文化財などデータベースの記載内容

輝石安山岩ノ巨石数十個相重ナリテ高サ約一〇メートルノ小丘ヲナス。先史時代ニ赤城火山ヨリ流出シタル火山泥流中ノ「流レ山」ノ残存セルモノナリ。

昭和 46 (1971) 年

前橋市史編さん委員会が刊行した『前橋市史』・「第三節：自然の推移」の解説

前橋泥流の起源については、なお検討を要するが、浅間火山に発し、吾妻川の谷沿いに流下して前橋付近の古期扇状地の一帯にひろがったという可能性が大きく、地学上大いに興味がある。「岩神飛石」や「お艶ヶ岩」など伝説の巨岩は、もとは坂東橋のやや上流付近にあったものが前橋泥流にまき込まれて現位置にいたり、その後浸食によって泥流堆積物中からあらいだされたうえ、再び新期の砂礫(広瀬川砂礫層)中に埋められたものと考えることができる。(新井房夫)

昭和 49 (1974) 年

前橋市観光協会が刊行した『前橋の伝説百話』・「第一話：岩神の飛石」の解説

昔、赤城山が大爆発したとき、溶岩と一緒に流れてきたといい、また、利根川の大洪水のとき、田口町の片石山の一部分が欠けて、ここに流れついたともいい、あるいは、浅間山の大噴火の際、飛んできたともいわれています。この飛石には次のような伝説があります。「あるとき、石工たちが相談して、この岩を割り石材として利用しよう、ということでそれぞれ道具をもって、この岩のまわりに集まりました。一人の石工が岩にノミを打ち込みました。二つ、三つ音がしたかと思うと、それっきりノミを打つ音が、しなくなってしまいました。仲間が不思議に思いよくみると、どうしたことかその石工は顔を真っ青にして、じっとうずくまっているではありませんか。そしてノミを入れたところからは、真っ赤な血が吹き出していました。その石工は、手がしびれ、ついに死んでしまいました。ほかの石工たちは、この不思議な出来事に驚いて、だれ一人この岩にノミを打ち込む者はいなくなってしまう。土地の人たちは、このことを知ってから神のたたりと信じ、岩を恐れ、ここに神社を建てました。これが飛石稲荷であり、ここから“岩神”の町名が出たといえます。(佐藤寅雄)

昭和 51 (1976) 年

「現地の説明板」の解説

国指定天然記念物 岩神の飛石 所在地 前橋市昭和町三丁目 29-11 岩神稲荷神社
周囲が約 60m、高さは地表に露出した部分だけで 9.65m、さらに地表下に数 m は埋もれているこの大きな岩は、「岩神の飛石」と呼ばれています。昔、石工がノミをあてたところ、血が流れ出したという伝説があります。岩は赤褐色の火山岩で、表面には縞のような構造も見えます。しかし大きさのそろった角ばった火山起源の岩や石が多い部分もあります。この岩は火口から溶岩として流れ出したものでなく、火口から噴出した高温の火山岩や火山灰などが冷えて固まってできたものと考えられます。この地点より約 8 km 上流の坂東橋の近くの利根川ぞいの崖では、10 万年以上も前に赤城山の山崩れでできた厚い地層の中に同じ岩が認められます。このことから、この岩は赤城火山の上半部が無くなるほどの大規模な山崩れに由来することがわかります。さて前橋の街の地下には、「前橋泥流」と呼ばれる地層が厚く堆積しています。これは約 2 万年前に浅間山で起こった山崩れが、水を含んで火山泥流に変化して流れてきてできた地層です。この地層の中にも、岩神の飛石と同じような石が多く含まれています。またここは火山泥流の堆積後、平安時代以前までの間に、利根川が流れていたとこ

ろでもあります。これらのことから、この岩は現在の坂東橋のあたりに堆積していた地層の中から、約2万年前の火山泥流によりこの近くまで押し流されてきたものと思われます。さらにその後の利根川の洪水によって、今の場所まで運ばれてきたと考えられます。岩神の飛石は、私たちに前橋とその周辺の自然の歴史とその営みを教えてくれます。（文化庁・群馬県教育委員会・前橋市教育委員会）

昭和55（1980）年

前橋市教育委員会が刊行した『前橋の歴史と文化財』の解説

「往時、近在ノ石工数名相語ヒ、岩神ノ飛石ヲ切り出シ一儲ケナサントシ、鑿フ此ノ岩ニ當テタル處、多量ノ血液流出シタル為、石工等ハ怖レ戦キ、以来、此岩ヲ神トシテ祀リ一祠ヲ建立シ、後年、稲荷神社トナリ現在ニ至レルモノニシテ、所在町名モ祀リシ岩神ヲ取り岩神町ト称ス」。（昭和10年、集録のまま） こうした不気味な伝説を秘めた岩神の飛石は、昭和町の稲荷神社境内にある。この石は、一見いくつかの岩石を寄せ集め積み重ねたように見えるが、実は一塊の石で、その大きさは、周囲約70cm、高さは地表露出部分で9.65cm、埋没部分を含めると20cmにも達するとみられる巨岩である。その岩質は、敷島公園内にある「お艶ヶ岩」などと同じ輝石安山岩であるが、酸化鉄分などを含んでいるため、赤褐色に見える。ところで、この大きな火山岩塊が周囲の地質とは全く関係なく、ポツンと存在することから、だれということなく飛石と呼ぶなど、その存在の原因についても、古くから多くの人の関心を集めてきた。このことについて、群馬大学の新井房夫博士は、『前橋市史』第1巻の中で、カルデラ形成前の赤城火山の山頂付近にあった岩塊が、大規模な火砕岩類の流れにのって、坂東橋付近に押し出され、いわゆる「流れ山」となっていたものが、その後、「前橋泥流」によって押し流され、現在の位置に至ったものと推定している。そして、このことは地質時代の新生代第四紀、洪積世後期の時代に当たる約24,000年前、前橋砂礫層によって形成されていた古期扇状地面が、突如、大規模な前橋泥流の押し出しに襲われ、厚さ10数cmもある火山泥流堆積物におおわれてしまい、ここにほぼ今日の前橋の地形ができたということを物語っていると指摘している。不気味な伝説を秘めて、稲荷神社のご神体とされる岩神の飛石は、私たち前橋の地形形成の歴史と、自然の力の巨大さを語りかけてくる巨大な記念物でもある。（松島榮治）

昭和60（1985）年

煥平堂が刊行した『国指定県指定：群馬県の史跡名勝天然記念物』の解説。

前橋市市街の平坦な沖積低地の上に巨大な岩塊が突出している。地表からの高さは約10m、周囲は約60mある。以前は、十数m離れた火山の爆発によって、火口より飛来したと考えられていたもので、飛石の名が付けられた。横に稲荷神社が造営され、神社のご神体として大切に保存されている。神社を飛石稲荷と呼んでいる。飛石は茶褐色の安山岩質溶結凝灰岩で、地下にも地表部のものと同程度の岩石が埋没しているものと推定され、全重量は数百tあることになる。約8km北方の利根川左岸に類質の岩石が小丘をなして点在する。岩質から、小丘は赤城火山の古期成層火形成期中期の大規模な火砕流末端の「流れ山」と考えられる。一方、同質の岩石が利根川岸に露出する前橋泥流中に多数含まれている。これらのことから、利根川左岸に小丘として分布する赤城火山起源の溶結凝灰岩が遙か離れた浅間火山から流下した泥流に削りとられ、前橋付近まで流下して堆積し、その後、利根川によって泥流の火山灰の部分が浸蝕されて、飛石の上半部が地表に姿を現したものである。（木崎喜雄）

昭和 63 (1988) 年

前橋市教育委員会が刊行した『前橋の文化財』の解説

一見いくつかの岩石を寄せ集め積み重ねたように見える巨岩であるが、実は一塊の石で、埋没部分を含めると周囲 70m、高さが 20m にも達するとみられる。この巨岩(熔結凝灰岩)は、推定によるとカルデラ形成前の赤城火山の山頂付近にあった岩塊が、大規模な火砕岩類の流れにのって、坂東橋付近に押し出され、いわゆる「流れ山」となっていたが、その後、「前橋泥流」によって押し出され、現在の位置に至ったものと考えられている。これは、前橋の地形形成の歴史に大きくかかわっていることであり、また、巨大な自然の力を物語る神秘の岩である。

(3) 平成時代

平成 11 (1999) 年

前橋市教育委員会が刊行した『増補・前橋の文化財』の解説

一見いくつかの岩石を寄せ集め積み重ねたように見える巨岩であるが、実は一塊の石で、埋没部分を含めると周囲 70m、高さが 20m にも達するとみられる。この巨岩(熔結凝灰岩)は、推定によるとカルデラ形成前の赤城火山の山頂付近にあった岩塊が、大規模な火砕岩類の流れにのって、坂東橋付近に押し出され、いわゆる「流れ山」となっていたが、その後、「前橋泥流」によって押し出され、現在の位置に至ったものと考えられている。これは、前橋の地形形成の歴史に大きくかかわっていることであり、また、巨大な自然の力を物語る神秘の岩である。

平成 20 (2008) 年

上毛新聞社刊行の『群馬新百科事典』の記述

岩神の飛石 前橋市北部にある大きな赤い火山岩。周囲の平坦な地表から 10m も高く突出している。稲荷としてまつられている。マグマのしぶきが火口の周囲に積み重なってできた岩石である。今から 2 万 4300 年前に浅間山がまるごと崩れた。崩壊した大量の土砂は北に向かって流れて吾妻川に入り、渋川で利根川に合流し、関東平野に出て、そこに厚さ 10m の堆積層をつくった。岩神の飛石は、この崩壊土砂のひとつとして浅間山から前橋まで流れてきたものである。飛石になった岩は浅間山の心棒をつくっていた硬い部分だったから、大きいまま前橋にたどり着いた。その後、利根川の水流によって、周囲にあった小さな石や泥は運び去られたが、飛石は大きすぎたのでこの場に残った。高崎市の烏川河床にある聖石も同じものである。前橋市と高崎市は、浅間山の崩壊土砂がつくった台地の上に形成された都市なのである。吾妻川沿いにも同様の岩石がたくさん見つかる。中でも中之条町の国道 145 号脇にある「とうけえいし」が立派だ。渋川市村上(旧小野上村)の畑の中や東吾妻町岩井田中(旧吾妻町)の吾妻川河床にも大きなものがある。浅間山崩壊で発生した土砂の流れは、北側の群馬県だけでなく、南側の長野県にも向かった。佐久市には、まさに赤岩という地名があって、岩神の飛石と同じ赤い岩が弁財天としてまつられている。また、塚原という地名もあって、田んぼの中に小さな丘が点在している。それらは、浅間山の崩壊土砂がつくった流れ山である。そこにも赤い岩がたくさん見つかる。

(早川由紀夫)

平成 23 (2011) 年

前橋市教育委員会が刊行した『新版 前橋の文化財』の解説

利根川の左岸に忽然とある周囲 70 ㍍、高さ 10 ㍍の巨岩で、地元では赤城山から飛んできたとの伝説がある。火山噴火の際に火口近くで飛び散った溶岩が堆積したもので山体崩壊にともなって発生した泥流で運ばれてきた。かつては赤城山の噴火によるものとされていたが、最近では浅間山起源で 2 万 4000 年前に発生した前橋泥流とともに前橋にもたらされたものであろうといわれている。

***参考：「とうけえ石」の現地説明板の解説（平成 9 年 3 月）**

中之条町指定天然記念物 とうけえ石（稻荷石・頭鶏石）

（指定）平成 6 年 12 月 1 日 （所在地）中之条町大字中之条町 1856 （形状）東西約 6.5m・南北約 9.5m・高さ約 5.5m （岩質）灰赤褐色 複輝石安山岩質溶岩塊

中之条から折田にかけての土地は、約二万年前的浅間火山（黒斑火山）の山体大崩壊の際、その泥流が中之条町の段丘面を覆って堆積したものである。町の天然記念物に指定されている「ながれ山地形」は、その時に形成された。この「とうけえ石」をここへ運んだのは、浅間火山の大崩壊で発生した巨大な「土石なだれ」が泥流（中之条泥流）となったものである。この泥流の中に含まれていた大きい岩の塊を覆っていた土や小石が長年の間の浸食によって洗い出され、岩だけが残し、今の「とうけえ石」となった。この約 2 万年前の大崩壊は、浅間火山の活動史の中で最大規模のものであり、この「とうけえ石」はその記念碑ともいえるものである。自然災害の猛威を正しく認識するうえに役立つものであろう。

（中之条町教育委員会）

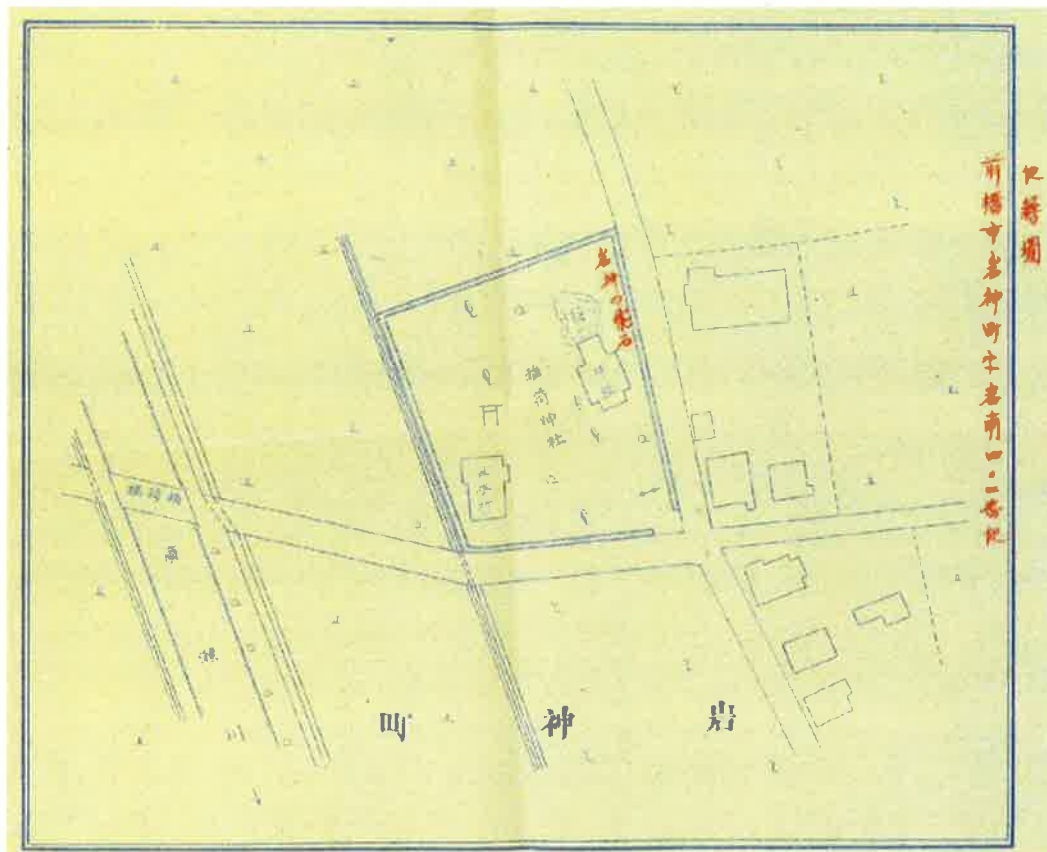


図 1. 昭和 13 年の指定申請に伴う付図 当時の「岩神の飛石」周辺の地籍がわかる。稲荷神社境内西側に鳥居があるが、古写真に見えるものと同一地点に思われる。なお、広瀬川はすでに改修されて古写真に見る位置から離れている。社務所の位置は、南側の道路拡幅によって、北側に移された。